

登高

杜 甫

風急天高、猿嘯哀

渚清沙白、鳥飛迴

無辺の落木、蕭々として下り

不尽の長江、滾々として来

万里悲秋、常作客

百年多病、独上臺

艱難苦恨、繁霜鬢

潦倒新停、濁酒杯

【作者】

杜甫（七一〜七七〇）盛唐の詩人で李白と並び称せられ、中国詩史の上での偉大な詩人である。字は子美（しび）。少陵（しよりりょう）または杜陵と号す。洛陽に近い鞏県（きょうけん）の生まれ、七歳より詩を作る。各地を放浪し生活は窮乏を極め、安祿山の乱に賊軍に捕らわれる。律詩に巧みで名作が多い。湖南省潭州（たしゅう）から岳州に向かう船の中で没す。年五十九歳。李白の詩仙に対して、杜甫は詩聖と呼ばれる。

【語釈】

\*登 高…昔中国では旧曆9月9日重陽の節句に小高い山や丘に登って酒に菊の花びらを浮かべて飲む風習があった。

\*無邊落木…あたり一面限らない木の枝や落葉。

\*蕭 蕭…ものさびしい 落葉するさざさわという音。

\*繁 霜…霜のように髪に毛が白くなったこと。 \*潦 倒…水かさかんに流れるさま。

\*新 停…最近やめた 禁酒したこと。 \*濼 倒…老いぼれる おちぶれる。

【通釈】

風ははげしく吹きわたり、天はいよいよ高く、猿の鳴き声が哀しげに聞こえてくる。見おろすと揚子江の渚は清く、砂浜は白く光って見える。その上を鳥が飛び回っている。果てしない木々はもの寂しい中にさざさわという音をたてて葉を落とし、尽きることがない揚子江の水はさかんに流れている。

はるかに遠くまで旅を続けるもの悲しい秋、一生多病である身をもつてひとり高台に登っている。自分の一生は、艱難の連続で、はなはだうらめしいことに鬢の毛も真つ白くなり、そのうえに老いぼれてせめてもの慰めであった酒も近頃は飲めなくなつた。この淋しさをはらすことすらできなげ。

【備考】

この詩は成都を去り夔（き）州にいた七六七年（大暦二年）九月、多病で酒もやめ、ただ一人高台に登って作る。五十六歳の作。「唐詩三百首」「唐詩選」に所収されている。四聯全て対句で構成されており、前半に景を、後半に情をのべ古今の七言律詩中の第一と評される。